

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁸m 1 2 3 4 5

特250
304

長篠戰略記

始



250
204

長篠戦畧記目次

- 一、長篠城……………一
- 二、長篠城包圍……………二
- 三、長篠城内の軍議と鳥居勝商の誠忠……………五
- 四、徳川織田聯合軍の來援と其陣容……………七
- 五、醫王寺山の軍議附大通寺杯井……………〇
- 六、武田軍の前進と其の陣容……………三
- 七、極樂寺山の軍議(酒井忠次の献策)……………四
- 八、鳶ヶ巢山の奇襲……………五
- 九、設樂原の決戦……………六
- 十、長篠城外の掃蕩……………〇
- 十一、織田徳川兩軍の凱旋……………二



忠剛



而

昌泰



Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '八', '六', and '一'.

忠

國

忠

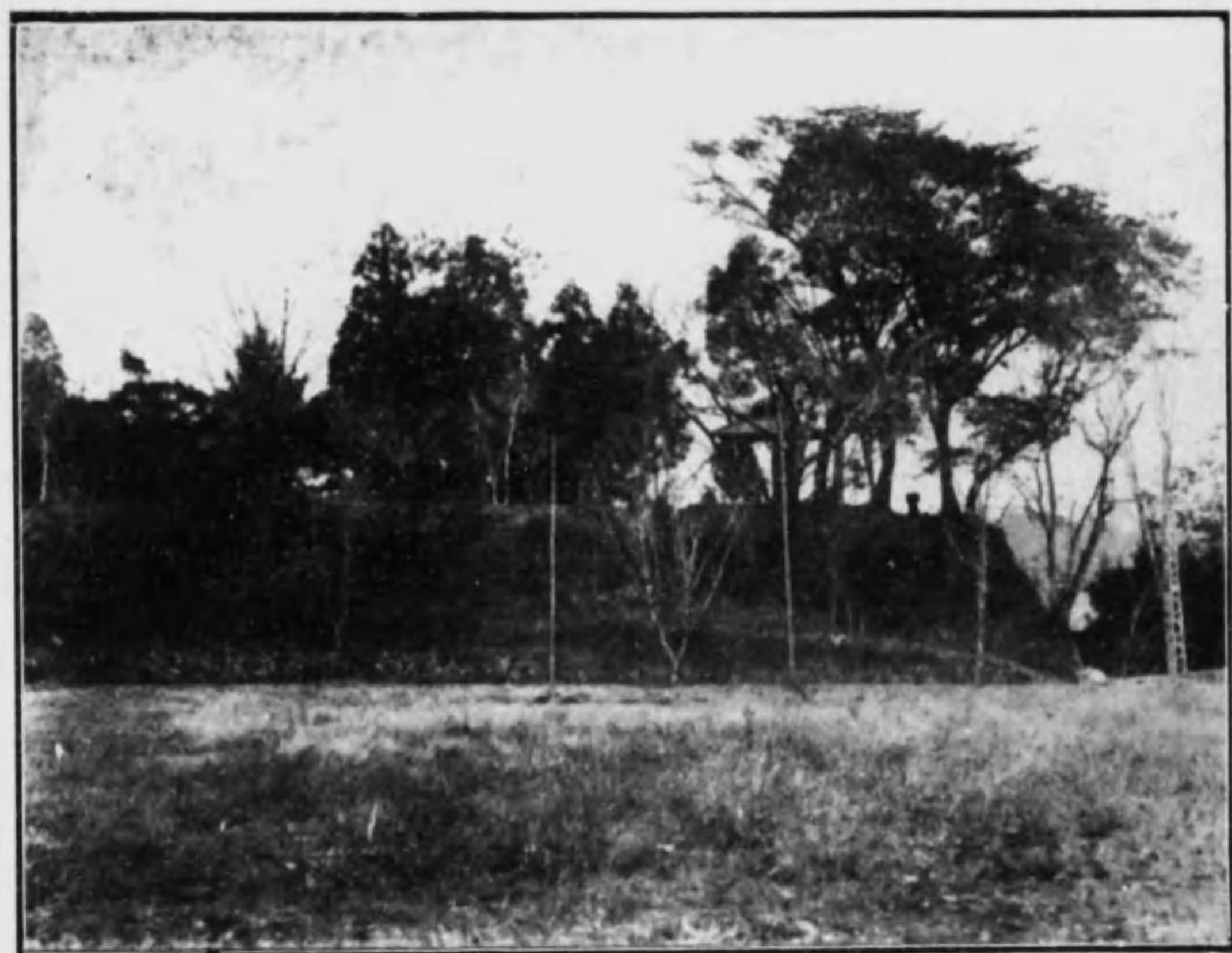
清和

筆

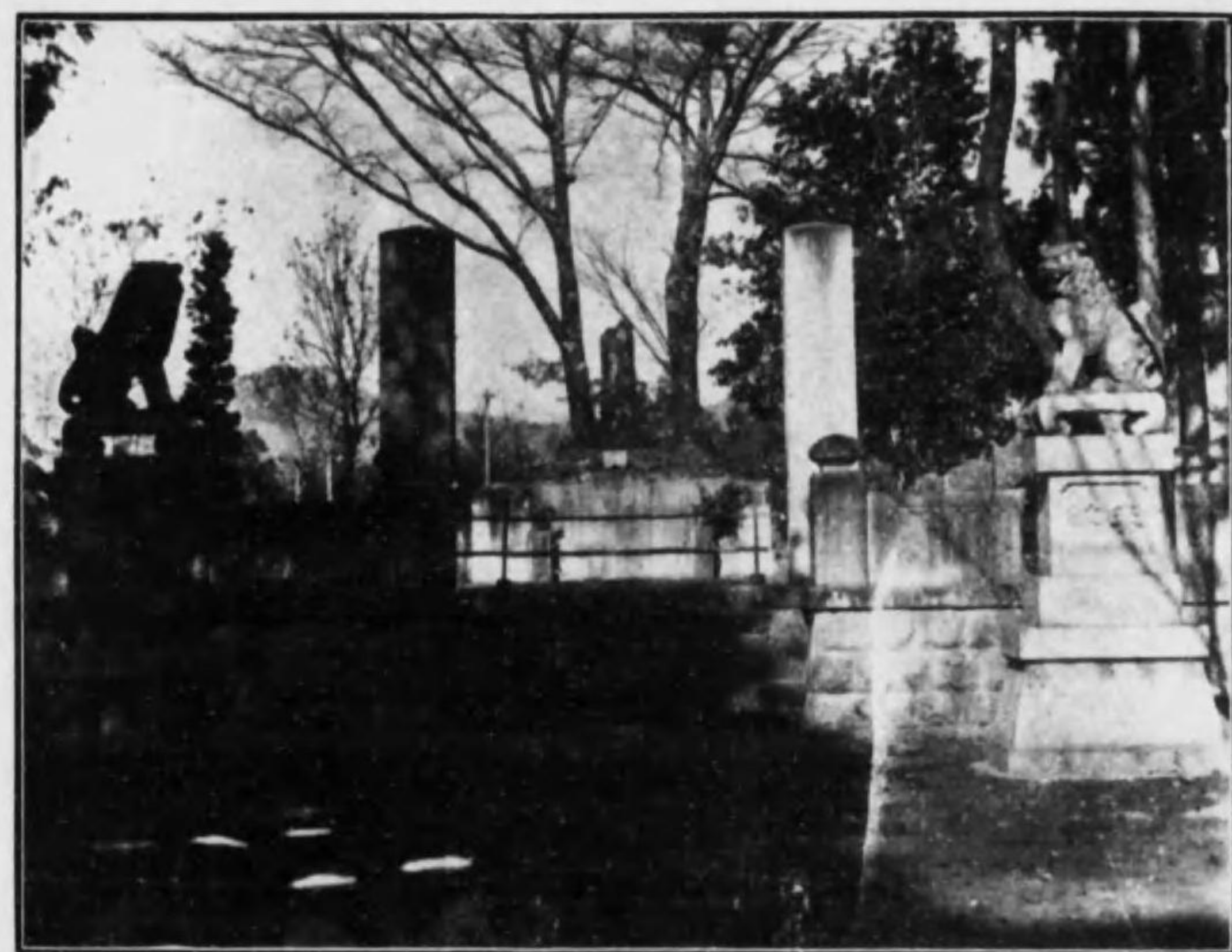
大正十四年

李耕書

李耕



長 篠 城 址



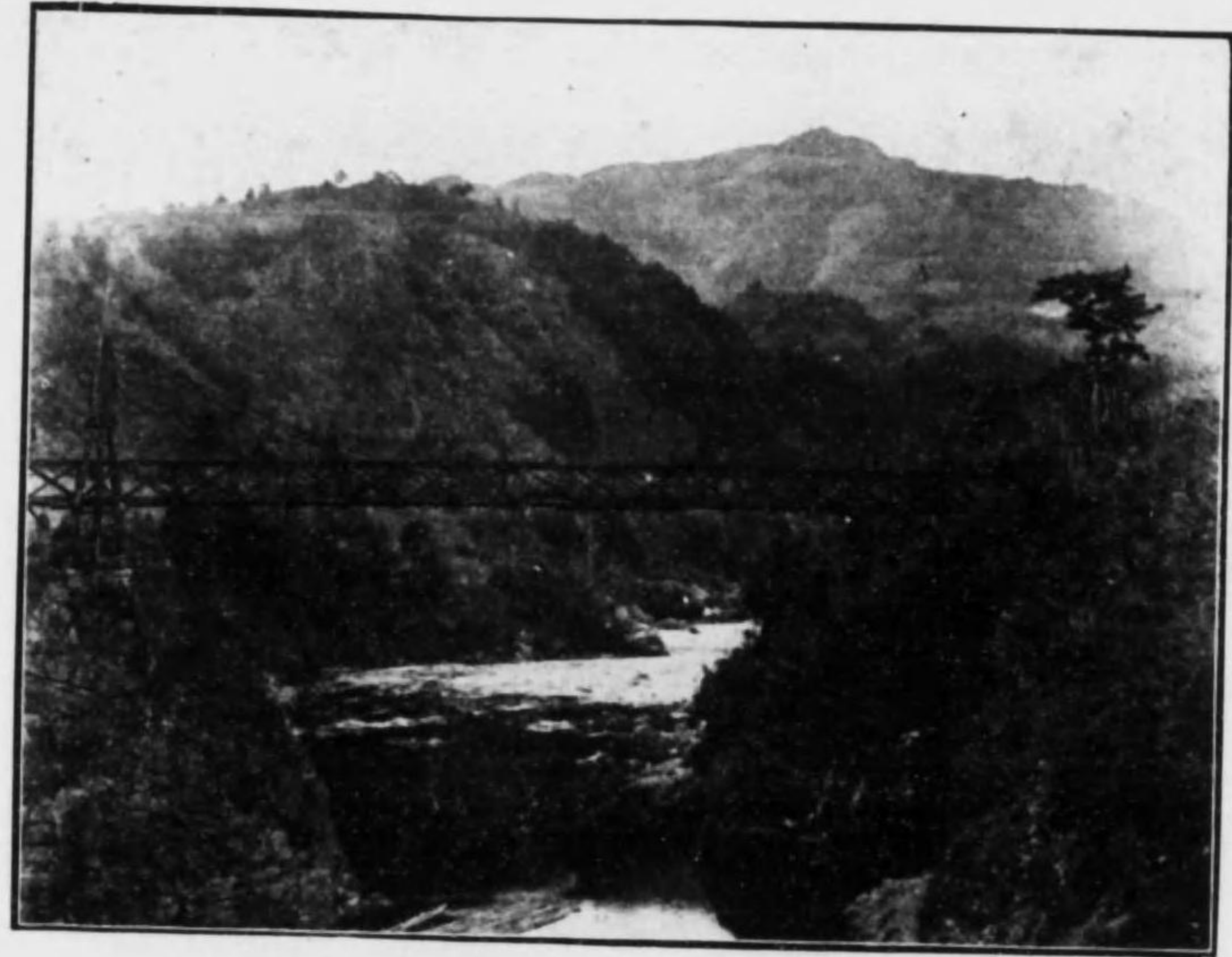
鳥 居 勝 尚 墓

長篠城址

大正十一年四月

鳥居勝尚

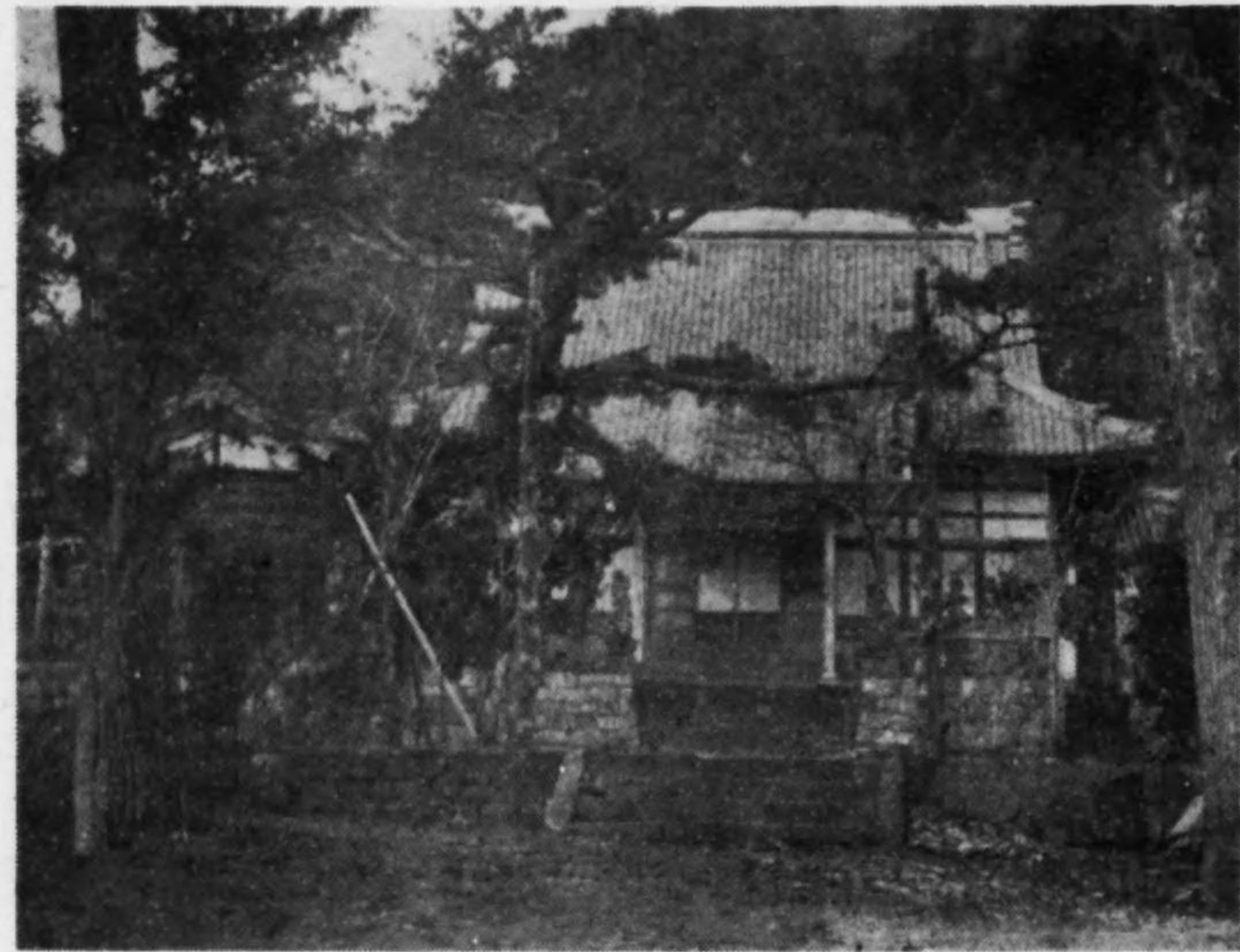




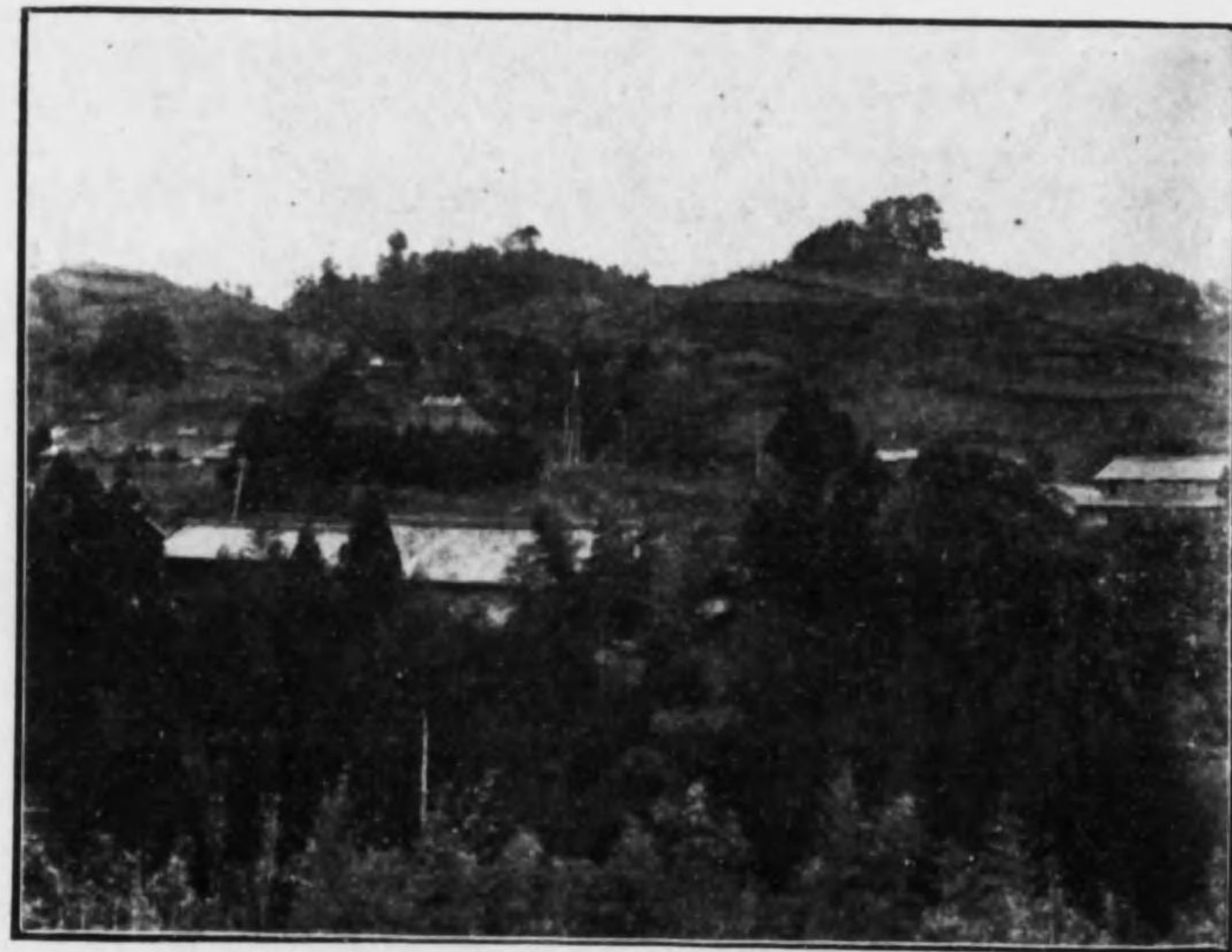
合 渡



井 杯 寺 通 大



（地陣本田武） 山 寺 王 醫



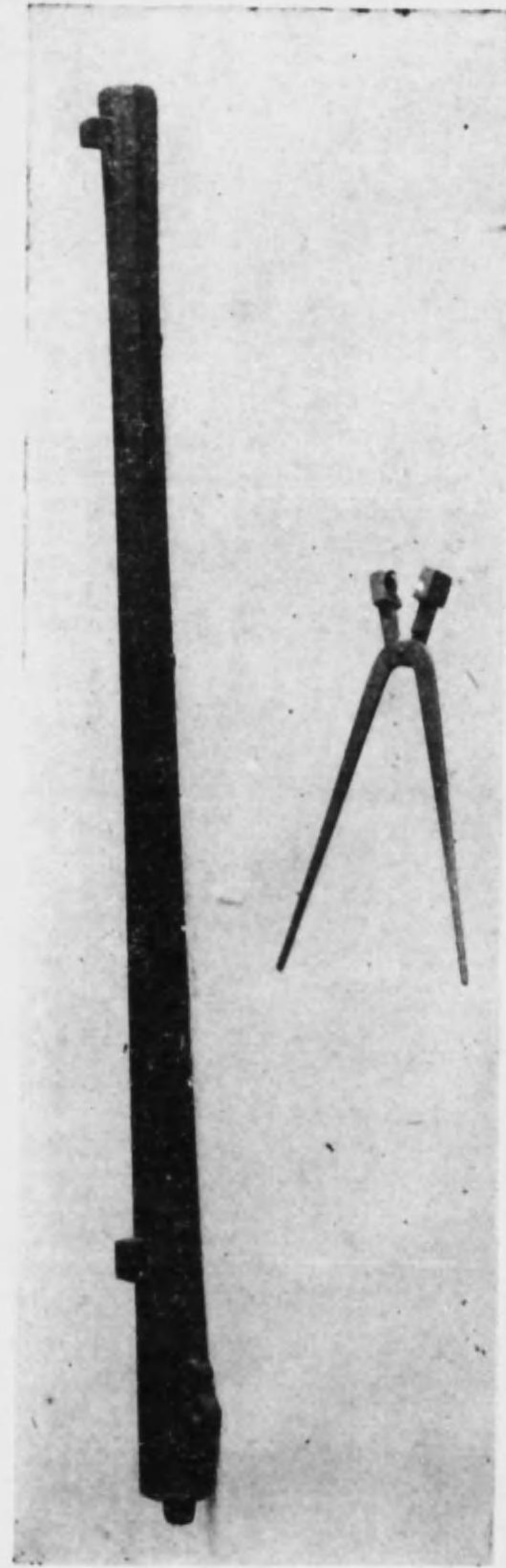
山 葉 ケ 鹿



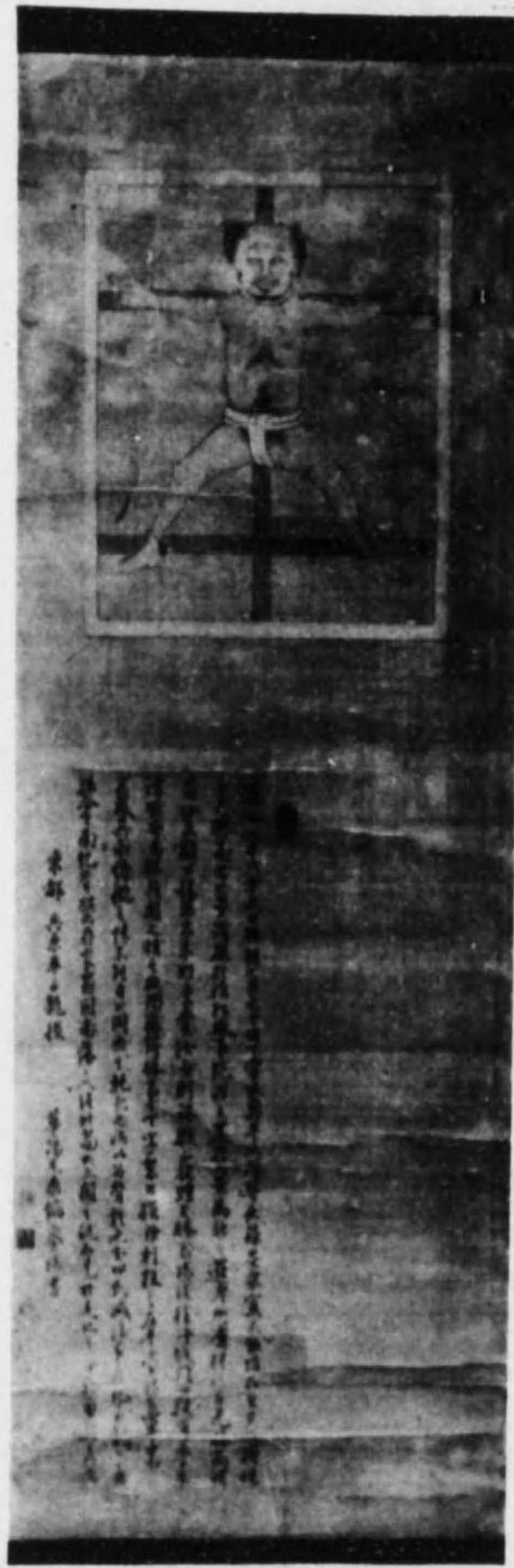
山正彈及山白茶



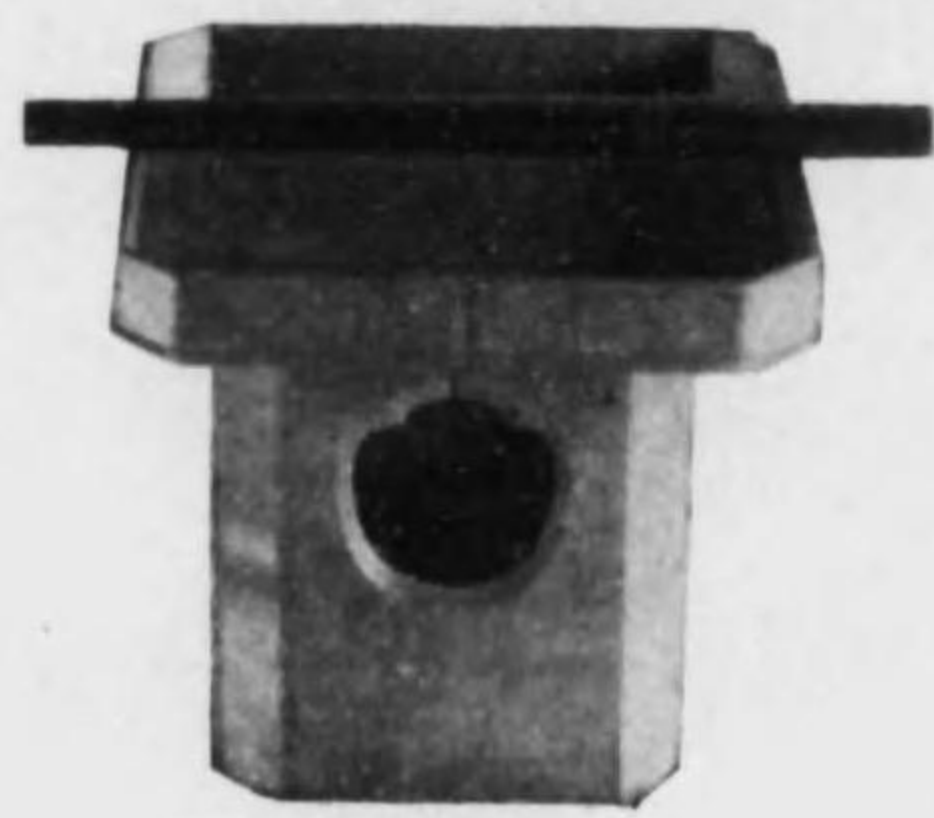
塚人千



正天ノ頃シヒ砲(身砲)並ニ彈鑄



島居勝商殺ノ圖



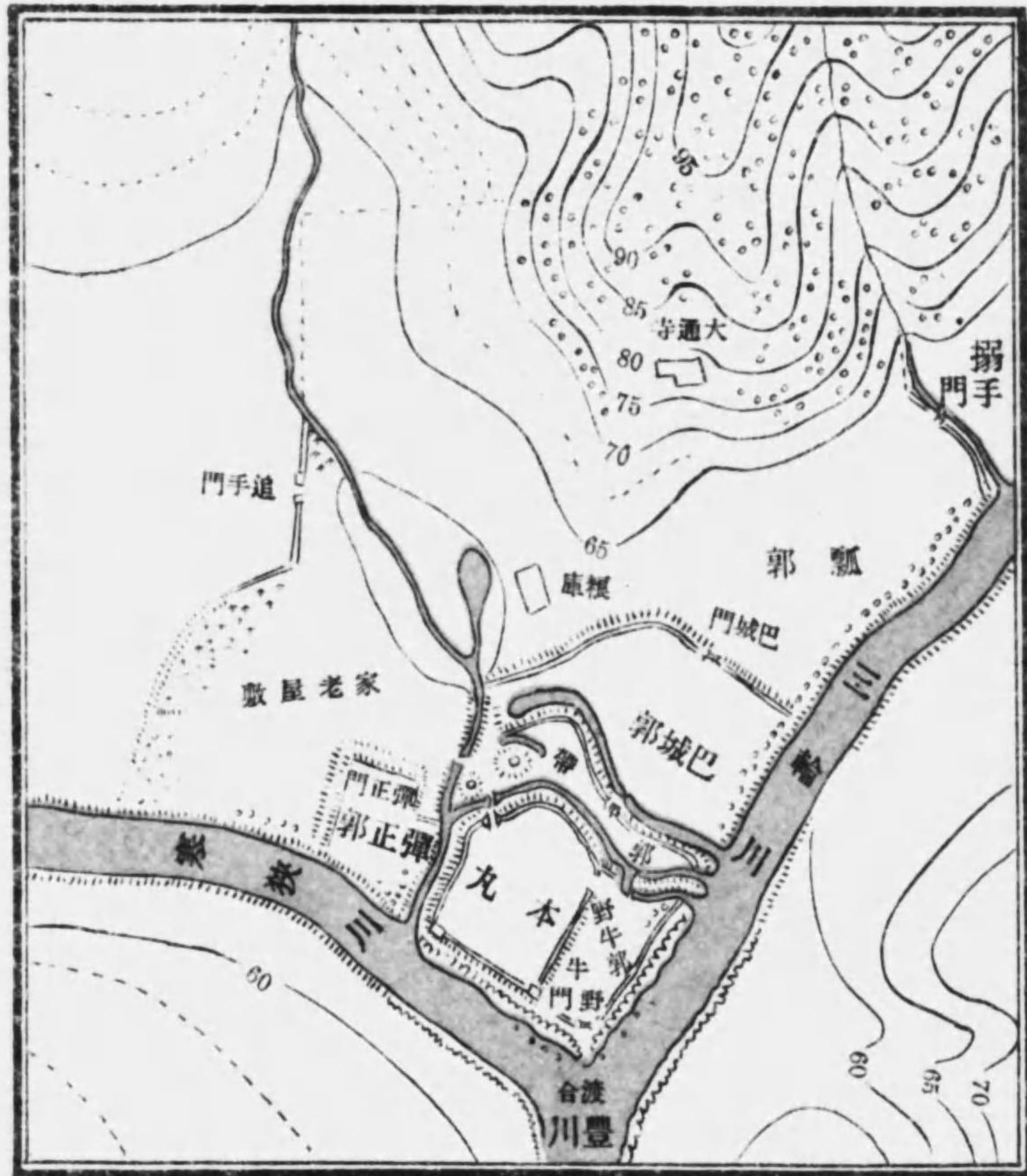
島居勝商出城ノ際城主ヨリ拜領セシ刀ト云傳

序

長篠戦役は、史上顯著なる事蹟なり。而して吾人に教訓を與ふるもの多し。抑、該戦役は、勇猛天下に敵なき武田信玄の遺將勝頼が、精銳無比の諸將士を率ゐ、奥平貞昌の固守せる長篠城を包圍攻撃せるを發端とし、織田徳川二氏の聯合軍と雌雄を決したる激戦にして、兩軍が奮戦苦闘所謂義を山嶽の重きに置き死を鴻毛の輕きに比し、各其主恩に報じたる勇敢義烈の士尠からず。就中鳥居勝商は、長篠城の糧食彈藥缺乏し、落城旦夕に迫るのとき身を抽て重圍を脱し、援軍を外に請ひ其使命を全うし、遂に捕へられて篠場野に磔殺せらる。嗚呼、其の事蹟の壯烈なる千載の下懦夫をして奮起せしむるものあり。今や是等忠烈の士逝いて三百五十有余年、人心漸く浮華輕佻の風を兆し荒怠弛廢に傾き、忠勇義烈の遺跡も訪ふ人稀にして動もすれば忘却されむとす。此の時に當り長篠村尙武會は長篠戰略記を編纂し遍く之を江湖に頌ち世道人

長篠城概圖

1/5000



心を激勵し國民精神の涵養に資せられんことを。余其美舉を悦ぶに幸に邦
 家人人のために淬礪努力するの一大警策たらしめん事を一言以て序に充つ。

昭和四年九月

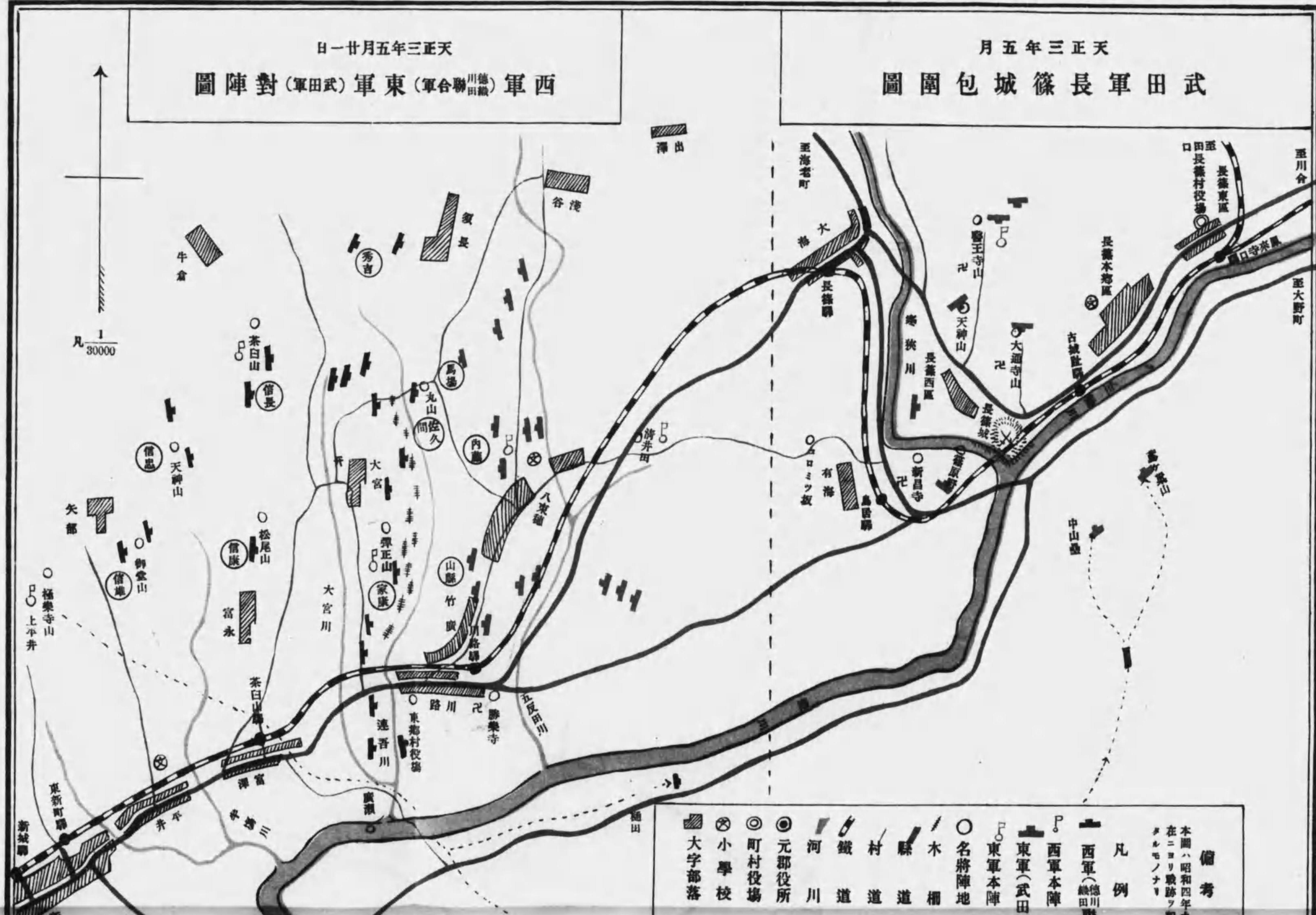
菅沼庄十

圖 湖 泉 新 身



日一廿月五年三正天
圖陣對(軍田武)軍東(軍合聯川德)軍西

月五年三正天
圖圍包城篠長軍田武



↑
1
凡 30000

備考
本圖ハ昭和四年
在ニヨリ戦跡ヲ
ヲルモノナリ

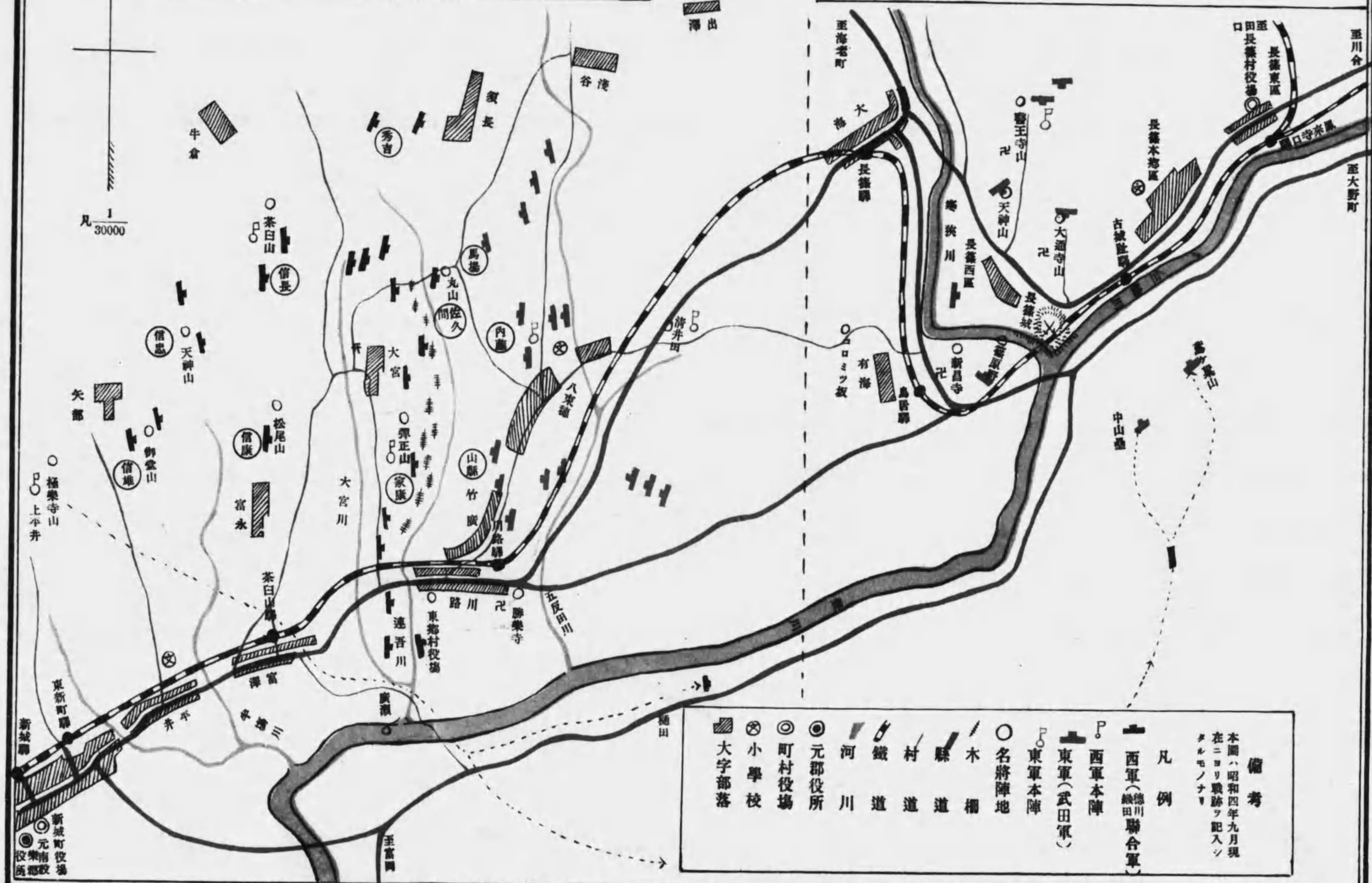
凡例
 西軍(徳川軍)
 西軍本陣
 東軍(武田)
 東軍本陣
 名將陣地
 木柵
 村道
 鐵道
 河川
 元郡役所
 町村役場
 小學校
 大字部落

日一廿月五年三正天

圖陣對(軍田武)軍東(軍合聯川德)軍西

月五年三正天

圖圍包城篠長軍田武



備考
 本圖ハ昭和四年九月現在ニヨリ戦跡ヲ記入シタルモノナリ

凡例

- 西軍(徳川聯合軍)
- 西軍本陣
- 東軍(武田軍)
- 東軍本陣
- 名將陣地
- 木柵
- 村道
- 鐵道
- 河川
- 元郡役所
- 町村役場
- 小學校
- 大字部落



長篠戰略記

(一) 長篠城

長篠城は愛知縣南設樂郡長篠村にあり、豊川の上流寒狹川三輪川の合流点に
位し、本丸、帶郭、巴城郭、彈正郭、野牛郭、瓢郭等あり、西北を追手こし、
東北を搦手こし、東は三輪川、西南は寒狹川を以て直ちに城壕をなす。
城の北に大通寺山及び醫王山、天神山あり、東及び南は川を隔て、船着山一
帶の連山に對し、城の西南は川を隔て、有海原に接す、寒狹川、三輪川共に
其の幅四五十間、岸の高さ三十間乃至四十間、恰も壘壁の如く、濁水の時は
水深僅に五六尺なれども、春夏秋は出水多く、暴雨の際は水深七八間にも及
び、水勢猛激となり最も要害の地なり。
此の城は永正五年今川氏親の將、菅沼元成の築きし所にして、子元通、孫貞
景と代々居城し、四代目正定、武田氏に屬す、時は元龜二年なり。

天正元年六月、徳川家康遠參二州の兵を以て攻圍し、遂に之を取り、松下景忠をして守らしむ。

天正三年二月、家康謂らく、長篠城は甲斐、信濃の要路に當り、且つ武田氏の切に恢復を企圖する所なり、守將其の人を得ざれば危しと、依て智謀兼備の奥平貞昌（後信昌と改む）を以て之を守らしめ、曩の松平景忠に加ふるに更に松平親俊を以てし之が副たらしむ。

(二) 長篠城包圍

天正三年五月（紀元二千二百三十五年）武田勝頼、甲斐、信濃、上野の兵一萬五千余を率ゐて長篠城を包圍す。

是より先き徳川の士、大賀彌四郎岡崎に在りて叛を謀り、其黨小谷甚左衛門、倉地平左衛門、山田重英等と連署して款を勝頼に送り、内應を約す。勝頼乃ち大兵を率ゐて甲斐を發し、信濃より參河に向ふ、中途にして大賀の陰謀露顯したるを聞くも、已に大兵を動かして空しく還るを欲せず、其の二千余の兵をして長篠に向はしめ、五月六日自ら其の余を率ゐて吉田城に向ひ、二連木、牛久保に放火す、家康父子兵を出して之を逆へ、彼我の先戰、薑原に於て小戰あり、勝頼敢て決戰をなさず、兵を班し長篠城を包圍す。

其の部署左の如し

- | | | |
|--------------------------------|---------------------------------------|-------|
| 城の北（大通寺山） | 馬場信春、武田信豊、小山田昌行等 | 二千人 |
| 城の北西（天神山） | 一條信龍、眞田信綱、弟昌輝、土屋昌次等 | 二千五百人 |
| 城の西（寒狭川左岸） | 内藤昌豊、小幡信貞等 | 二千人 |
| 城の南（有海原） | 武田信廉、穴山信君、原昌胤等 | 千五百人 |
| 城の南東 <small>（霧ヶ峯山及其支嶽）</small> | 武田信實等 | 一千人 |
| 城の北 <small>（醫王寺山本陣）</small> | 武田勝頼 <small>武田信友、子信光、望月信雅等屬す、</small> | 三千人 |
| 同 | <small>（醫王寺山後方）</small> 甘利信康、跡部勝資等 | 二千人 |

城の西(寒狭川右岸) 山縣昌景、高阪昌澄等

一千人

兵數總計 一萬五千人

是時城中は兵數僅に五百余人に過ぎず、貞昌乃ち松下景忠をして瓢郭を、松平親俊をして彈正郭を守らしめ、自ら他の諸方面を指揮す。

五月八日以後、甲軍連日攻撃すれども善く拒ぎ戦ふ。

十一日薄暮有海原の甲軍、筏を寒狭川に泛べ、渡合より野牛郭に逼らんこす、城中の士、山崎信宗、生田勝重等矢石を飛ばして之を卻く。

十二日甲軍又本丸の西隅に逼り、地道を鑿ち城に入らんこす、貞昌之を知り亦地道をうがち銃を發し敵兵を狙撃す、甲軍驚き去る。

十三日夜甲軍城内の糧庫を奪はんこ欲し、大通寺山の隊進んで瓢郭の西北を攻む、守兵よく拒ぎ或は突出奮戦す、甲軍死するもの八百余人遂に退く。

貞昌其の障壁の大に破れたるを見て瓢郭の守兵を撤し本丸に收む。

是夜、甲軍望樓を追手門の前に構へ以て城中を下瞰せんとす、城兵巨銃を以て之を撃破す。

十四日甲軍總攻撃を行ひ城に逼る、城中の諸將士奮戦して多數の敵兵を殺傷す、甲軍乃ち退き復た容易に攻撃せず、意を長圍に決し柵を城外に環らし、又鳴子網を渡合に張り以て城兵の逸出に備ふ。

(三) 長篠城内の軍議と鳥居勝商

十四日甲軍の總攻撃を受けたる城兵は死者狂となり、元氣益々旺盛なれども奈何せん、城中僅に四五日の糧を餘すのみ、是れより先き貞昌援兵を岡崎に乞へり、然れども未だ其報答を得ず、乃ち諸將士を會し軍議す、諸將士皆曰く「援絶え糧食乏し此際餓死せんよりは寧ろ突出して戦死せん」と貞昌許さず曰く「徒死は益なし予獨り衆に代り自殺せん」と

鳥居勝商奮て其の密使に任ぜんことを請ふ、貞昌之を許し貞能に呈する書を

授く、勝商乃ち約して曰く、恙なく圍を脱するを得ば烟を雁峰山に揚げて證
 こなし、後復た山上に來り援軍の消息を示さんこ、時己に夜半なり。

勝商野牛郭より出て奇智を以て敵哨を欺き、急湍に入り鳴子網を破り游泳し
 て長走を経て廣瀬に達し、十五日の拂曉雁峰山に上り煙を揚げ馳せて岡崎に
 至り、奥平貞能を経て家康に謁し、貞昌の言を致して曰く、城中の將士未だ
 疲れず彈藥も乏しからず、獨り糧食數日を支ふるに過ぎず、若し援軍の到來
 遅き時は貞昌自殺して諸將卒の餓死を救ふの外復た術策なしこ、

家康之を織田信長に見えしむ、信長其の勞を賞し且つ曰く大軍將に明日を以
 て發せんこす、汝宜しく予と同行すべしこ。

勝商之を辭し一刻も速かに使命を果せる狀況を主君及城兵に知らせん希望を
 述べ即夜馳せ歸り、十六日再び雁峰山に煙を揚げ、尋て城に入らんと欲し潜
 に有海原に到り間を覗ふ、城兵の脱出に氣付たる甲軍は圍を益々嚴重にし、
 岸上には木柵を植ゑ出入を誰何し、地上には細砂を敷きて足跡を驗し、水中

には巨索を交叉し其の端に鈴をつけて音響に注意する有様なれば、人は勿論
 魚も鳥も容易に出入し難き警備なり。

勝商は擔夫に混じ機會を伺ふ際、甲軍穴山信君の土河原彌太郎に捕へられ縛
 に就く、遂に醫王寺山の本陣に呼出されて尋問を受く、勝商告ぐるに實を以
 てす、勝頼其の忠勇を愛し縛を解き論して曰く「汝城門に至り援兵來らす速
 に降るべしこ城兵に告げよ然らば厚く汝を賞せん」こ、勝商佯り諾す。

勝頼乃ち兵十余人をして之を擁し追手の城門に到らしむ、勝商城に向ひて高
 からに呼んで曰く「諸君憂ふるここなかれ徳川織田二公大軍を率ゐて既に出
 發せらる圍の解けんは二三日の内にあらん」こ勝頼大に怒り之を篠場野（有
 海原）に磔殺す。城中勝商の復命を聞き士氣益々奮ふ、後ち四日を経て設樂
 原の大戦あり長圍自ら解く。

(四) 徳川織田聯合軍の來援と其陣容

五月十日家康長篠の急を聞くや、小栗重常を岐阜に馳せ援兵を信長に請ひ、翌十一日、更に奥平貞能を遣し來援を請ふ、信長方は評議區々なりしも、結局家康の請を容れ信忠と共に大兵を率ゐ五月十三日岐阜を發し、十四日岡崎に到れり。

翌十五日夜、鳥居勝商により長篠城の危急を知るや信長、家康相議して各急に進軍を令し、信長父子は十六日牛久保に到り、守兵若干を留め參遠諸將の質子を收め、十七日野田に野營し、十八日設樂原の西方に到り、左の如く位置したり。

- 極樂寺山(上平井) 織田信長(柴田勝家屬す)
- 天神山(富永の内夏目) 同 信忠(河尻秀隆屬す)
- 御堂山(矢部) 北畠信雄(稻葉一鐵屬す)
- 茶臼山(富永の内川上) 佐久間信盛、池田信輝、丹羽長秀、瀧川一益
- 大宮高地 羽柴秀吉、森長可、水野信元、安藤範俊、蒲生氏郷等
- 牛倉

兵數合計 三萬余人

家康父子は十七日岡崎を發し、野田に野營し、十八日織田軍に先たちて設樂原に到り、左の如く位置す。

- 彈正山 徳川家康
- 松尾山 同 信康
- 彈正山の南方連吾川右岸
 - 大久保忠世、本多忠勝、榊原康政、石川數正、平岩親吉、
 - 酒井忠次、鳥居元忠、内藤家長、松平忠次、高力清宗等

兵數合計 八千余人

信長甲軍の騎戦に長ずるを知り、之を防がん爲連吾川を隔て、柵を樹て、諸隊を其の後方に配置す、然して全軍の銃手一萬人より三千人を選抜し、佐々成政、前田利家、塙直政等をして其の司令たらしめ、之を戒めて曰く勝頼勇を恃みて無謀、而して其の兵は騎戦を好む、故に柵を以て之を遮り、銃を以

て瘡さんごす。然れども敵騎前進するも遽に發射する勿れ、其の柵前に逼るに際し千挺づつ交代して一齊に射撃せよと、又長柵には三十間乃至五十間毎に門戸を設けて逆襲に便せり。

(五) 醫王寺山の軍議 附大通寺杯井

甲軍は長篠城の守備頗る固く、急に之を攻むるときは徒らに多くの士卒を損ずるを憂ひ、長圍して飢餓に陥らしめんご欲せしに、徳川織田の聯合軍來援すご聞くや速に城將を誘降せんご欲し、五月十五日貞昌の父奥平貞能の書簡を偽作し矢文を城中に送る、曰く「徳川公は織田氏の出馬を待ちて後詰せんごするも織田氏來らす赴援の日期すべからず汝自ら決する所あれ」ご然れごも城將貞昌は其贋筆たるを知り、且つ鳥居勝商の言により援兵の不日來るべきを思ひ倍々堅守に努む、依て武田方の計畫は愈々齟齬せり。

五月十九日、勝頼は醫王寺山の本陣に諸將士を會し、織田徳川の聯合軍に對する軍畧を評定し、自ら曰く敵兵方さに設樂原の西に陣す、天我に快勝の機會を與ふるものなり、宜しく進軍之を擊破すべし、長篠城の監視は鳶ヶ巢以下諸壘の兵にて足る、其他は悉く寒狹川を渡り背水の陣を敷き一大決戦をなすべしと、馬場信春、内藤昌豊、山縣昌景等の老臣之を不可ごし、諫めて曰く「織田徳川各々全力を擧げて來る、衆寡敵し難し兵を收めて歸るに如かず、敵若し追躡せば之を信濃の險に要し壘殺すべきのみ」ご意見は進撃退陣の正反對に別れたり、嬖臣跡部勝資曰く武田氏は新羅三郎殿以來未だ嘗て敵を避けず今戦はずして軍を班へし敵に背後を見せしむるは祖先を辱かしむるものなり。

信春曰く然らば先づ遮二無二長篠城を改めて之を陥れ而して後退くべし、願ふに城中所有の銃は五百に過ぎず、一千人の兵を損する決心あらばこの城を屠ることは左程難事にあらざるべし、而して後退かば我武維揚るに非ずや、跡部勝資之を非として曰く大敵を前に控へ徒らに千人を失ふ、不利これより

甚だしきは無し。

信春又曰く若し退却を好まざれば城を屠りし後、主將及公族之に據り、山縣内藤及某等川を渡り敵軍と對峙すべし、然るときは我は糧運の便あり以て持久戦に堪ふべく、敵は江濃及畿内の兵多し必ず曠日彌久に耐へず、自ら退去せんこと疑なしと。

勝資曰く信長は敵を見て空しく軍を班す漢にあらず、彼若し來り戦はば奈何。信春曰く然らば死を決して戦はんのみ。

勝資及主戦派は曰く已むを得ずして戦ふと、我より進んで戦ふと、戦ふは則ち一なり、寧ろ先んじて敵を制するに如かすと。

勝頼大に之を善とし、武田家相傳の寶器（白旗と無楯の鎧）に誓ひ進撃に決す、信春以下宿將老臣其の不利を知ると雖も復如何ともする能はず。

この夜、馬場、内藤、山縣等の老臣大通寺山に集まり武田家の御運も是まてなりと歎きつゝ、馬柄杓を以て山中より湧き出づる清水を汲み水酒盛をなし

今生の別を惜みたりと云ふ、悲壯の極ならずや。（長篠戦蹟を訪ぬる人にて「大通寺の杯井」に立寄り一掬の涙を催さるはなし宜なる哉）

（六）武田軍の前進と其陣容

五月二十日勝頼勝敗を一擲に決せん、全軍を率ゐて寒狭川を渡り徳川織田の聯合軍に對し、連吾川の東方に配陣す、其陣容左の如し。

右翼隊 約三千人 淺木附近に陣す

馬場信春、穴山信君、眞田信綱、其弟昌輝、土屋昌次、一條信龍等

中央隊 約三千人 清井田附近に陣す

内藤昌豊、武田信廉、原昌胤、安井景繁、和田業繁等

左翼隊 約三千人 清井田の南方高地に陣す

山縣昌景、武田信豊、小山田信茂、跡部勝資、甘利信康、小幡信貞等

總豫備隊約三千人 有海の西方に陣す

武田勝頼 武田信友、子信光、
望月信雅等屬す

以上徳川織田聯合軍に對するもの、外尙後方に左の諸隊を置く。

長篠城監視兵 約二千人

小山田昌行、高坂昌澄、室賀信俊等

鳶ヶ巢山及其支壘 約一千人

武田信實等

兵數合計 一萬五千人

(七) 極樂寺山の軍議 (酒井忠次の献策)

五月二十日、信長甲軍が我策圖に中り寒狭川を渡り進み來るを見て家康初め諸將士を極樂寺山の本營に招き軍議す、會々織田の斥候來り甲軍の備堂々たるを報告す、上方勢愕然色を失ふ、徳川の士酒井忠次曰く、某昨日間諜をして敵狀を偵察せしめしに其兵數極めて寡少、味方の勝利疑なしと、信長大に

喜んで曰く怯者の眼中草木も亦兵なり、獨り左衛門忠次然らずと、遂に酒を命し諸將士を饗す。

忠次又鳶ヶ巢山奇襲の策を献して曰く今夜潜に一隊を發し、船着山を迂回して鳶ヶ巢山及久間山の後方に出て、其砦を襲ひ放火して敵軍の氣を奪はば勝算疑なしと、信長怒氣を帯びて曰く是迂策なり、斯る大軍に左様の小策を用ふべきものにあらずと。叱責されたる忠次は面目を失ひ其の場を退出す。

軍議終りて諸將退きし後信長は密かに忠次を召し打ち解けたる態度にて汝の謀最も妙なり、先に叱責せしは謀の漏泄せんことを恐れたるのみ、速に出發せよと馬銜を賜ひ之を賞す。

(八) 鳶ヶ巢山の奇襲

酒井忠次は信長に軍監を請ふ、信長乃ち麾下の銃卒五百を分ち金森長近、佐藤方秀等を従はしめ、且つ曰く敵の營に達せば烽火を擧げて我に示せと、家

康も亦松平家忠、同忠次、本多庶孝、其子康重、松平伊忠、同康忠、奥平貞能、菅沼定盈、西郷家員、設樂貞通等を従はしめ、奥平信光、近藤秀用、豊田藤助等をして嚮導たらしむ。兵數約三千人、忠次直ちに郷ヶ原を發し、設樂岩廣を経て廣瀬に到り豊川を渡り、設樂貞通の一隊五百人を船着山の麓樋田に派し、敵兵の南下に備へしめ、松山越に到り馬を下り、甲を脱し、之を擔ひ嶮岨を攀づること三町許、暗中摸索奘貫して上り菅沼山に到り部伍を整ふ。二十一日拂曉、其兵を分ちて三隊となし、一は中山の壘に到り、敵營に放火し、且つ烽を舉ぐ、甲兵狼狽して鳶ヶ巢山に走る、他の二隊は直ちに鳶ヶ巢の營に向ひ前後より之を攻む、守將武田信實力戰して之に死し、殘兵は自ら其の營を火き概ね乗本村に走り、南に走りし者は設樂貞通の要撃に遭ひ皆殺さる、是に於て君ヶ伏戸、姥ヶ懷等の支壘も悉く潰走したり。

(九) 設樂原の決戰

徳川織田聯合軍は二十日夜鳶ヶ巢に迂回する兵を割きたる後、信長は其の營を茶臼山に進め、諸隊を柵内に配備し別に敵を誘致する爲に佐久間信盛の一隊を左翼の柵外に出し、又右翼の柵外に大久保忠世の一隊に銃手三百人を附して側撃に充て徐に甲軍の進撃を待つ

五月二十一日拂曉、甲軍は意外にも喊聲を長篠城方面に聽き鳶ヶ巢山、中山には煙焰の昇るあり扱は西軍背後に廻りしかと衆皆顔色を失ふ。

勝頼乃ち全軍に令し急に展開進撃せしむ。

東軍左翼隊の山縣隊は小笠原、跡部、甘利等の隊二千余人と共に西軍大久保隊の右に迂回し、連吾橋の南木柵なき處より西軍の側方に出でんとせしも、渠流廣深、兩岸絶壁にして踰ゆべからず、乃ち回りて大久保隊と戦ふ、大久保隊は鐵砲を以て之を打倒し、繼ぐに突撃を以てし、一進一退混闘の修羅場となる。

東軍の中央隊は西軍の織田兵に向ひ内藤、原、武田信廉の隊何れも木柵に逼

れば織田兵の銃火に撃破せられて其の目的を達するを得ず。
東軍左翼隊の小山田隊は、山縣隊等の後を承け、小幡隊は更に小山田隊に代り大久保隊と戦ひ、徳川兵の前なる木柵に逼らんとせしも銃火及突撃の爲に破られて退却す。

東軍右翼隊の馬場隊は西軍左翼柵外の佐久間隊を衝く、佐久間隊併り破れて走る、馬場隊追ふて之を破り其の屯せし丸山を奪ふや其隊を止めて柵前に進まず、織田兵大に望を失ふ。

馬場信春、人をして眞田信綱、弟昌輝、土屋昌次等に告げて曰く予思ふ所あり暫く此處に止らんとす、卿等前進して功をたてられよと、眞田隊土屋隊交互に奮進し木柵に逼る、織田兵一齊に銃火を發し死傷算なし、東軍屈せず將さに柵を破らんとす、西軍柴田隊、羽柴隊等其の北方森長村より迂回して之を側撃す、信綱、弟昌輝、及昌次等苦戦奮闘相前後して死す。

東軍總豫備隊、武田信友父子、望月信雅及勝頼麾下の士も中央及両翼の諸隊に踵ぎ奮進したりと雖も大勢已に支へ難く皆後方に退却す。

是より先き東軍の左翼隊に於ては山縣昌景飛丸に斃れ、其他の諸隊も過半死傷し、是に至りて跡部隊先づ走る。

是時西軍佐々成政、信長に告げて曰く敵軍の旌旗漸く動搖す宜しく全軍をして之に乗せしむべしと、信長之に従ひ全軍に總攻撃を命ず、是に於て西軍悉く柵を出で、織田兵は正面より徳川兵は左側より一齊に進撃す。

甲軍馬場信春はこの形勢を觀て、人を馳せて勝頼に退去を進め、自ら其後方を掩護し、且つ戦ひ且退き、勝頼已に遠く去りて其の影を見ざるに至り、猿橋附近より馬首を西に回らし出澤岡阜に駐り追撃を支へ遂に首を西軍に授く。

東軍中央隊の内藤昌豊も勝頼の退去するを目送し、信春に先だちて宮脇附近に戦死す。

東軍皆鳳來寺山方面に潰走し、追撃に逼られ寒狭川に阻せられ橋を争ひ壑に陥る者無數、一萬五千の大軍免れて歸る者僅かに三千に過ぎず、勝頼は二三

の從騎と共に小松瀬を涉り黒瀬を過ぎ武節の城に入る。
是戰午前五時に始まり午後三時に畢る、西軍の斬獲する所の首一萬餘級而して其被れる死傷も亦六千を下らず。

(十) 長篠城外の掃蕩

長篠城監視として城の西方に屯し在りし高坂昌澄、小山田昌行等は鳶ヶ巢山及其支壘の陥落を目前に望見し、又設樂原の敗戦を聞かや、大事已に決したりと自ら其營を火き一部は大野方面に、他の一部は門谷方面に退却す。
奥平貞昌兵を率ゐて城を出て之を追撃し昌澄以下二百余人を殲し大野に至て回へる。

鳶ヶ巢山を抜きたる西軍中、松平伊忠は敵兵を追躡し乗本村より豊川を越えて北に進み大海に到りしが是時曩に門谷方面に退きし小山田昌行は主將勝頼と生死を共にせんを欲して回へり來り、恰も伊忠の背後に出で、乃ち之を攻撃せり伊忠敵を前後に受け苦戦し遂に之に死す。
大野方面より回へりし城兵は鳶ヶ巢山迂回兵と相呼應して共に久間山の壘を攻め迂回兵の部將奥平貞能先登して之を抜く、壘兵豊川を越へ有海原を経て走る、城兵之を追撃し多く首級を獲たり。
鳶ヶ巢山及其支壘の東軍は首級を西軍に獲らるゝ者約三百七十余人西軍の之に死したる者も亦三百余人に及びしと云ふ。

(十一) 織田徳川兩軍の凱旋

設樂原合戦の翌二十二日、信長家康の二公有海の西方なるコロミツ坂に到り、長篠城を望見し長篠城主奥平九八郎貞昌及び其一族を召出され、今回の籠城拔群の功なりとて御盃を賜はり賞讃せられ、信長よりは信の一字を賜ひて信昌と改名せしめられ、家康よりは貞昌の戦功を賞せられ知行加増の仰あり、城主奥平の名譽この上なし。

信長家康の兩公其の歸途川路の松樂寺に立寄り、今回の戦勝に因みて自今勝樂寺を改むべき旨仰あり。斯くて信長は濃州岐阜城へ、家康は遠州濱松城へ何れも目出度凱旋せられたり。

昭和四年九月十五日印刷
昭和四年九月三十日發行

愛知縣南設樂郡東郷村大字富澤十九番地

編輯者 川合森之助

愛知縣南設樂郡新城町字並二百四十番地

印刷者 前澤元治郎

愛知縣南設樂郡新城町字並二百四十番地

印刷所 東三印刷株式會社

發行所 愛知縣南設樂郡長篠村尙武會

324

357

終

